
風に浮く

むく。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風に浮く

【コード】

N1358N

【作者名】

むく。

【あらすじ】

その日に限ってすべてが最悪だった。

それでも、あなたと出会えた。

走る

もともと、走ることを得意とする体質ではなかった。速いわけでも、目に留まるほど遅いわけでもなかった。

ただ、そんな中途半端な自分が嫌い、とてつもなく嫌って、その結果、走るという概念から逃げる。そういう人間だった。

急がされることの方が少ない生活で、

私が走らざるを得ない状況などほとんどなかった。

運動は苦手、活発な方でもなく、とりわけおとなしかった。

だからといって現状に満足できていない自分が、ひどく浅はかに思えた。

それなのに。

その日は最高に最悪な日で、3、4年ぶりに忘れ物をして、登校中に帰宅した。

とびきり早く家を出ているわけでもなく、気付いたのも駅の改札口だった。

愛用している通学カバンの中には、なくてはならないはずの財布が見当たらなかった。

通勤ラッシュ時の駅は込み合い、おだやかに探すことすらままならず、

落としたにすれ忘れたにすれ、家に帰るしか手段はなかった。

自転車置き場まで必死になって走り、鍵を刺して、自転車に飛び乗り、

今までにないくらいスピードで家までの帰路を走って、

家まであと5分、のところまできて、後輪が急に重くなり . . .

降りて確かめてみると、案の定、タイヤは見事にパンクしていた。

泣きそうになりながらも、思うように進まない自転車を押して家に帰った。

その時点で、ゆっくり探し物をする時間もなかった。

しかし、大体は自分の部屋のベットかバッグか机、にあるはずの財布が見当たらなかった。

自分の部屋のものというものを、をひっくり返す勢いで探し物をして、それでも見当たらずにパニック状態になっているとき、携帯のマネーモードが鳴った。

苛立ちから通学カバンの中身をぶちまけ、携帯を手に取るうとしたとき、

分厚いファイルから二つ折りの財布が出てきていることに気付いた。大袈裟なほどの絶望と悲しみが込み上げる。自分が急に嫌になった。携帯に受信されたメールはレンタルビデオ屋の会員用メールで、こんなときに心配してくれる友達すらいらないのかと嫌気が差した。

このまま、遅刻どころか一日休んでしまいたい、そんなことが頭をよぎった。

それでも私は急がざるを得なかった。

昨日まで散々悩んで悩んで書き上げたレポートの提出日は今日の一日間目で、

その時間を逃すと、もう受け取ってもらえないというおまけ付きだった。

頑固な教員で、少し前の課題を遅れて出した生徒に対して異常に厳しく、

その理由が体調不良であれ、受け取ることはなかったのを覚えている。

「社会ではそんなのは通用しないんだぞ」彼は言った。遅刻なんて尚更だ、と。

でも、仕方の無いこともある、と私は思った。昨日までは共感するところも少しはあったんだけどな。

使い物にならない自転車は置いて、私は駅まで必死で走る。

もしかしたら、と期待したけれど、他の自転車は生憎使えなかった。母はパートへ乗って行ってしまったし、兄はスペアキーを失くして、もうひとつは持ち歩いているし、父は自転車を持っていなかった。のんびり行けば40分、走っても私の体力じゃ35分の距離を、それでも間に合いたくて死に物狂いで走った。遅刻でもいい。ただ、一時間目に間に合えばいい。目を付けられるのだけは御免だった。

それでも、普段の運動不足が祟って、目の前がぐらついてうまく走れなくなった。

貧血だ、と思った。身体は強い方ではなく、朝食も食べてなかったこともあり、

横断歩道の途中で足がふらついて、一度立ち止まった。

夏の日差しが容赦なく私を照りつける。身体が浮いたような錯覚がした。

風が吹いて、そのまま流れていく。暑いという感覚はもうなかった。ただ疲れて、目を開けることすら容易ではなく、そのまま意識を浮かせていた。

そこから、何があったのかわからないまま、私は土手にたどり着いていた。

きれいとは言えない川に引き寄せられるようにして来たのであろう足は、

走った後の感覚のまま、力がうまく入らなかった。

「・・・どうして」

さっきは確かに横断歩道にいたのに。

訳もわからず足元を見やると、30センチほど浮いているのに気が

ついた。

両手は空で、広げると微かに地面が透けて見える。

嫌な汗をかくのと同時に妙な理解をする。私は幽霊になったのだ。あからさまな表現だったかもしれないが、本体が死んだ、のは確かだと思っただ。

てのひらを握ってひらいて、それを繰り返しながら呆然と水辺に浮いていた。

ふと、生霊かもしれないとぼんやり考える。

死んだと考えるのは浅はかだ。幽体離脱という言葉すらあるのだから。

怖い話の類が大好きな兄から聞いたことがある。

人は、生きながらにして魂が浮遊することがあると。

「それなら、どうして・・・」

ぼそりと声にならない声で呟く。

私が兄から聞いた生霊は、ひどく憎しみを抱いて形を成したのばかりだった。

この世に憎しみなんて抱いた覚えはない。

ましてや、人を憎んだことすらないに等しかった。

それならやはり死んだのだろうか、と心の底で思った。

兄は霊は水辺に集まるとも言っていた。

夜の海での怪談を聞かされ、怖がって眠れなかったこともあった。

そんな私が、恐怖していた幽霊になるだなんてとても考えられなかった。

死んだのだろうか。レポートも出せずに。

何のためにあんなに必死で走ったのだろうか、脱力感が襲った。

ざっ、と、背後で砂利を蹴る音がした。

私が後ろを向くのとほぼ同時に、小石がばらばらと跳んできた。

咄嗟に目を瞑ると、皮肉を含んだような笑い声が聞こえた。

「当たるわけないだろ、霊なんだから」

恐る恐る目を開くと、同年代であろう仏頂面な青年がいた。

走る(後書き)

続き 執筆中

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1358n/>

風に浮く

2010年10月12日05時06分発行